



第 20 回

「ガストホーフ・ツァ・ムルデンタールシュペレ」

ピーター・ドイグ

キャンヴァス、油彩 高さ196×296cm 2000～02年
シカゴ美術館蔵(アメリカ)

©Peter Doig. All rights reserved, DACS & JASPAR 2022 G2809

具体と抽象の混在

ピーター・ドイグの作品を初めて見たのは、2020年に東京国立近代美術館で開催された「ピーター・ドイグ展」でした。

チラシに載っていた《ガストホーフ・ツァ・ムルデンタールシュペレ》を見たとき、伝統的な媒体である絵画を用いているにも関わらず、どこか親しみやすさを覚えたのと、画面に漂う小匙1杯^{さじ}くらいのミステリアスな雰囲気^{つか}に、心をぐっと掴まれました。

実際にドイグの作品を見ると、想像以上にキャンヴァスが大きく、そんな大画面の空間表現は、大胆な構図ながらも奥行き・高さ・広がりなどがしっかりと描きこまれているという印象を受けました。ドイグの作品を紹介する際にときどき用いられる「ミステリアス」という言葉はそれほど重要ではなく、軽やかに絵を仕上げていくような印象が強かったのを覚えています。

《ガストホーフ・ツァ・ムルデンタールシュペレ》は、画面奥と横に広がりを見せる自然を背景に、中央の鮮やかな色彩が施された壁のある道に二人の人物が立っています。どこ

かで見たことのあるような自然の実景に対し、中央の鮮やかな道と直立してこちらを見ている人物の非現実的な不自然さなどに、ちょっとした違和感を覚えます。

オーロラが見えそうな空には透明感のあるエメラルドグリーンが広がり、画面手前の地面にも呼応するように同系色が用いられています。一方で、中景の暗い色調の水面や木々は、画面全体の影の役割を果たしているかのようです。

ドイグの作品を目の前にしたとき、具体と抽象の表現が混在しているように感じました。そのような視点を踏まえると、本作では、画面手前の地面と思われる箇所は、色の面のようでありながら、ところどころ^{にじ}滲んでいたりするなど複数の手法^{うかが}が窺えます。ある程度は具体的に描かれていながらも、細部の抽象的な質感が魅力的です。

ドイグの作品は、過去の巨匠たちの作品との関連性について指摘されることも少なくないようですが、画面に意味を見いだしていくというよりも、豊かなキャンヴァスの表面を純粹に楽しむ方法を教えてくれる作家だと感じます。

1994年群馬県生まれ。アイドル。
2009年、アイドルグループ「スマイレージ」(後に「アンジュルム」に改名)の初期メンバーに選出。10年にメジャーデビュー、同年「第52回日本レコード大賞」最優秀新人賞受賞。19年にアンジュルムを卒業。アイドル業の傍ら、大学院で学んだ美術史の知識を生かし、『乙女の絵画案内』(PHP新書)など美術関連の書籍も執筆している。

和田彩花
わだ・あやか